

モンゴルへ「黒板大使」

全校目標、NPO寄付募る



喜んで黒板を湿らせて試験問題を書き、子どもたちが読み取っていた。傷んだ黒板の代わりに銅板を張ったケースもあった。

教室で使う黒板をモンゴルの全小学校に贈る活動を、文化人類学者らでつくるNPO法人「モンゴルパートナーシップ研究所」(大阪市)が始めた。市場経済になってから物価が高騰し、教室の黒板は老朽化して字が書けず、授業もままならない。寄付を募って毎年夏に新品を贈る計画で、モンゴル出身で大相撲で初の関脇になった朝青龍関や漫画家のちばてつやさんも応援している。

黒板1枚につき2万円を1月から募り始めている。寄付した市民の名前を書いた板を黒板に付け、贈った学校を訪ねるよう呼びかける。目標は計600校分の総額1200万円。第1便は8月の予定。朝青龍関は「父の出身地もモンゴル中部の草原地帯で、現地へも約30校分を寄贈したい」と申し出た。知人を通じて「ちばさんも協力する」。

研究所は、遊牧民を研究する小長谷有紀・国立民族学博物館助教授らが呼びかけ、昨夏に法人化した。名誉所長は梅棹忠夫・同館顧問。小長谷助教授は「日本政府の援助も黒板まで向けられない。大臣になるような人材が育てば、遊牧民に必要な整備も進む」と話す。問い合わせは研究所

長年の使用ですり減った黒板を背に、子どもたちが記念写真を撮っていた。昨年夏、モンゴル・アルハンガイ県で、提供・モンゴルパートナーシップ研究所

も使っていることがわかった。教師らはぬれぞう

(06・6920・8334)へ。